

プラント状況（本店会見）議事メモ

11/8 12:35

日時：平成 23 年 11 月 18 日（金）11:00～11:15

場所：東京電力本館 3 階大會議室

先方：記者 14 名（カメラ 3 台）

当方：原子力・立地本部 [REDACTED]

原子力設備管理部 [REDACTED]

広報部 [REDACTED]

配布資料：水処理設備の放射能濃度測定結果

[REDACTED] よりプラント状況に関する説明。

質疑：

Q. 水処理設備の放射能濃度測定結果について、 $\beta$  核種の濃度が 10 の 4～5 乗オーダーとなっているが、濃度が上がっているのは蒸発濃縮装置によって濃縮されているのが原因なのかな。

A. ストロンチウムに関しては、アレバの除染装置を通過していないので、 $\beta$  核種が取り除かれないまま処理水側に入っている。

Q. アレバの除染装置を通せばどの程度下がるものなのか。

A.  $1/10 \sim 1/100$  程度は濃度を下げられたと思う。 $\beta$  核種は外部への影響は小さいので、 $\gamma$  核種を中心に取り除いている。

Q. 10 の 4～5 乗レベルの濃度であることで、今後、最終的にどのような処理が必要になってくるのか。

A. 原子炉へ戻す注水においては核種が含まれていても問題はない。また、処理中はタンクに貯蔵しているので、 $\beta$  線が外部へ漏れてくることは無いと考えている。

Q. 最終的にはどのような処理をしていくのか。

A. 5, 6 号機と同様に構内に散水をするような場合においては、検出限界未満にする必要があるが、現時点では今までの方法は検討していない。

Q. 10 の 4 乗レベルの濃度でも R.O 膜装置を通す際に影響はないのか。

A.  $\beta$  線なので、R.O 膜への影響はない。ただし、カートリッジの交換など、水に直接触るような作業においては、 $\beta$  線被ばくを考慮しなければならない。水処理循環をしている限りでは外に出てくるものではない。

Q. 1 号機給水系からの注水を  $5.5 \text{ m}^3/\text{h}$  に減らすが、CS 系から注水するに当たっては流量をまた増やすということか。

A. まずは給水系からの注水量を減らして、温度の状況を見る。少しは温度が上昇すると考えている。その後、CS 系からも注水してみて効果を評価していきたいと考えている。

以上

(了) ハノダシテ←アレススマホ T 11/19 16:10 

暫定版

プラント状況(本店会見)議事メモ~~取扱不可~~

日時：平成 23 年 11 月 18 日（金）18:00～18:40

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者 14 名（カメラ 4 台）

当方：原子力・立地本部 [REDACTED]

原子力設備管理部 [REDACTED]

広報部 [REDACTED]

[REDACTED] より配付資料、プラント状況について説明。

## 配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について（第二百三十八報）
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における海水中の放射性物質の核種分析の結果について（第二百三十一報）
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の核種分析の結果について（11月17日採取分）
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果
- ・ 海底土核種分析結果
- ・ 柏崎刈羽原子力発電所周辺の沿岸における津波堆積物調査の実施状況  
～調査初日（平成 23 年 11 月 15 日） 柏崎市宮川における調査～

[REDACTED] よりプラント状況、配付資料に関して説明。

## 質疑：

Q. 福島第一原子力発電所における冬季対策について、配管類への対策をもう少し詳しく教えてほしい。

A. 凍結防止対策は、主に配管やホース類等で、當時水の流れのない箇所を中心とした対策を行う。まだ、使用済燃料プールにおいては、発熱源である燃料がプール内にあるため、現在 18°C 程度のプール水を 1 次側と 2 次側でそれぞれ通水させることにより配管等の凍結を防ぐことを検討している。

Q. 使用済燃料プールでの凍結防止対策の 1 つである水抜きとは何を指すのか。

A. 使用済燃料プールの循環冷却設備は常用側を A ポンプで運転しており、トラブルが発生した際には待機側の B 系に切り替える運用をとっている。通常時では B 系での水の流れが間欠的なため、冬季では凍結しやすい環境下にある。したがって、保湿材の敷設等でも対応困難な場合には配管等の水抜きをすることで対応することを検討している。

Q. 凍結しやすい場所は具体的にどういった箇所か。

A. 水の流れが全く無い、もしくは水の流れが間欠的な配管やホース類等である。なお、非常用高台ポンプのライン等が代表的な箇所である。

Q. 凍結しやすい箇所は、全体で何%くらいあるのか。

A. 箇所数としては見積もってはいないが、保湿材を敷設する配管の長さは約 4 km である。

Q. 保温材の敷設が完了するのはいつ頃か。

A. 材料は準備できている状況であるため、作業は約2ヶ月程度かかるのではないかと考えている。

Q. 現時点でのインフルエンザの発症者はいるのか。

A. 現在、把握している範囲では発症者はいないと聞いている。

Q. インフルエンザの発症者が出了した場合どのように対応するのか。

A. 新型インフルエンザを発症した際は、発症者の隔離が必要であるが、通常のインフルエンザ発症に関する対応はまだ決定していないため、発症の状況に応じて対応していく。

Q. 冬季対策について、作業完了の見通しが12月末や1月といった寒さの厳しい時期になるが、作業が終わるまでの間、配管等への巡回数を増やすといった対応をする予定はあるのか。

A. 巡回や点検等の回数を増やすことについては検討中である。具体的な作業の進捗状況に応じて判断して参りたい。すでに配管の凍結や水漏れの確認が発見された箇所については対応を急ぎたいと考えている。

Q. 現状では漏えい等の検知について、どの程度の時間でわかるといった指標はないということか。

A. 現在でも1回/1日のパトロールを行っているので、そこで発見することになると考えている。

Q. 凍結防止のために使用済燃料プールで水抜き対策をする等、通常と異なる環境になった際に、大規模な余震が発生し、シビアアクシデント対策等が求められることになった場合の対応は可能なのか。

A. 水抜き対策をするのは使用済燃料プールの待機系のため、温度の上昇については数日の余裕があると考えており、その間に水張り等の対応ができると考えている。ただし、他のシビアアクシデント等への対策として、猛烈な寒波等の影響により屋外にあるホースや配管等が凍結するといった場合には対応が必要だと思うが、過去の浜通りの様子を見る限り、そういう状況には滅多にならないと考えている。

Q. 昨日11月17日に発表された事故収束に向けた道筋において、「循環注水冷却システムの中期的安全が確保されていることを慎重に評価中」とは、どういう意味か。

A. 冷温停止状態に関しては、圧力容器の底部温度が概ね100°C以下になっており、放射性物質の放出を管理できている状態と定義しているが、現状と将来にわたって維持できるどうかを確認していく必要がある。将来に関しては、施設運営計画に記載した内容でもあり、原子力安全・保安院で審査していただいている。

Q. 循環注水冷却システムに関して、冬場の凍結リスク等にどのように対応するのか。

A. 来年1月を目途に保温材やヒーター等設置することで対応したい。

Q. 「東京電力福島第一原子力発電所・事故の収束に向けた道筋 進捗状況のポイント」資料のP.16における、東京電力が参画している活動のうち、現在行っている具体的な事例は。

A. 自治体で実施している除染活動に11月1日時点で93名の社員が参加している。国の

専門家派遣事業への協力や、除染計画の策定、除染メニューや放射線防護に関する問い合わせへの対応等の支援には12名参加している。

Q. 循環注水冷却システムが凍結する可能性はあるのか。

A. 福島県の浜通り地方に関しては、降雪は少ないが冬場の冷え込みが厳しい。そのため、水の流れの間欠的な配管やタンクは凍結防止対策が必要である。処理水を貯めるタンクは大気圧開放型であるため、仮に凍結したとしても圧力上昇はなく、対策はそれほど必要ないと考えている。

Q. 冬季対策について、ガレキ撤去等への雪害対策は考えているのか。

A. 新潟と異なり、福島では年に数回は降雪があるものの、大雪になることは滅多にないと考えている。ガレキ撤去はほぼ終了している状況であり、支障はないと考えている。損壊している柱や壁への積雪の影響により崩落の可能性もあるが、降雪の状況を見ながら立ち入り禁止区域の設定等の対策をしていきたいと考えている。

以上